

なぜ「いへ」は和歌から失われたのか

時田 麻子

(1) はじめに

前稿にて『萬葉集』と『古今集』の「やど」及び「やどる」という語について考察した。その中で浮かび上がってきたのが、「やど」という語を用いるときの空間把握の方法である。「やど」を用いるとき、多く視点は「やど」そのものではなく、「やど」の中の風物に注がれている。

一方、動詞「やどる」は旅の、自らの住まいでない場所に逗留することをさすが、二者は『萬葉集』における仮名遣いに使い分けがあり、別語であったと推定される(境田四郎氏「萬葉の『ヤド』と『ヤドリ』」『女子大文学』7号、1955.2、伊丹昇氏『ヤド』と『ヤドル』『文学論藻』31巻、1965.6など)。しかし、発音と意味の類似性からか、既に『萬葉集』から「やど」にも「やどる」の意味をもつ例がみられる。「やど」と「やどる」は重なる部分を持っていたといえる。

さて、「やど」は上代では『萬葉集』に特有の語彙であり、中古に入っても散文にはほとんど見られないことから和歌中で用いられる特有の語だと考えられる。しかし、同じような「すまい」を指す語でありながら「いへ」という語は、『萬葉集』が用例のほとんどを占め、『古今集』以降は和歌中にはほとんど用例を見ない(下段表参照)。

『萬葉集』・八代集と和歌を通観していると、「やど」も「いへ」も一つの建築物(たとえば寝殿など)をさす語ではなく、庭なども含めた「すまい」全体を空間として指示する語であり、その空間は同一のものと考えられる。にもかかわらず、「やど」と「いへ」

は感覚レベルで異なる意味をもつ語だと把握されている。

本稿は、『萬葉集』と八代集における「やど」と「いへ」の差を検討しながら「いへ」語がなぜ中古の和歌で失われてしまうのか、ということを考えるものである。

イ へ				ヤ ド		
非・空間 複合語		空間				
詞	歌	詞	歌	詞	歌	
—	37	—	149	—	119	萬葉
20	3	23	0	0	36	古今
3	2	52	3	0	46	後撰
35	4	31	9	1	57	拾遺
16	5	57	0	5	66	後拾
26	1	42	0	8	18	金葉
10	1	32	0	3	12	詞花
18	3	47	0	9	28	千載
68	4	49	1	9	61	新古

論をはじめるにあたり『萬葉集』および八代集における「やど」と「いへ」の用例数を調べた。結果は右表のようになっていた。なお、「いへ」には複合語が多く見られるが「わぎへ」「わがへ」のみ「わがいへ」と同じにとらえ、「いへ」に含めた。また、『萬葉集』の例は歌に限定した。

① 「いへ」の空間

「いへ」という語についての先行研究は「やど」のそれに比べると多くない。しかし、上代における「いへ」語の用法について、

全体を俯瞰して述べた論文に、木村徳国氏（「いへ」語の非建造物説、1988）のものがある。木村氏は歌語としての「いへ」を「人」の側面が大きいものととらえ、①主として建築的なすまい、②建築と住まう人とが重なりをもつすまい、③家柄やクニに対応する語、以上三種類に用例を分類した。ただし、この分類は厳密なものではなく、解釈によってそれぞれに属する歌の数は変わりうる、とも述べている。さらに、③家柄やクニに対応する「いへ」は、記紀歌謡にも多く現れることから①・②に比べて古い用例だとする。ただし、筆者は全く建築空間とはかわらない「いへ」は歌にはさほど多くないと考えている。『萬葉集』巻一・1雄略御製「家聞かな 名告らさめ」のようなもののみで、ほとんどはどちらに重きを置くかはともかく、家系を示す語でもあり空間でもあると考えられる。

また、吉井巖氏は「いへ」と「やど」の作歌の場に着目して違いを指摘する。吉井氏は、「いへ」は圧倒的に旅の中で詠まれ、「いへ」に残してきた恋人／家族を思う文脈の中で使われる語であるという（「いへ・やど・やね」、『萬葉集』104巻、1980）。さらに、真鍋次郎氏は、通常「雨宿りをする」と解釈されている『萬葉集』巻三 265番歌

長忌寸奥麿歌一首
ケルシケルケルアムカミワノサキサノワタリニイヘモアラナクニ
苦毛零来雨可神之埼狭野乃渡尔家裳不有国

（萬葉三・265）

の「いへ」を論ずる中で、「家庭」「すみか・すまひ」の二種の「いへ」があるとし、「上代人がその概念内容として建物の外に、その住人としての『人』を不可欠の構成要素として意識してゐたこと明」ということを指摘している（「家もあらなくに」『萬葉集』74巻、1970.10）。

これらの先行研究が共通して述べるとおり、「いへ」語の中には

住人としての「人」を見るべきだろう。これを前提に『萬葉集』における「いへ」に対して私見を述べる。

笠朝臣金村塩津山作歌二首（うち一首）
シホツヤマウチコエケバワガノレルウマンツマツクイコフランモ
塩津山打越去者我乗有馬曾爪突家恋良霜

（萬葉三・365）

これは、あくまでも「いへ」は無生物的な建物、庭などを包括する空間である、と捉えると意味が通じない。恋人や家族がそこにあるからこそ、思う対象になりうる。そのとき「いへ」は自分が、あるいは思う相手（さらにはその家族）が所有しているものであるから、これを仮に「所有を前提とするいへ」と称することにす。その「人」は単にそこに滞在している者であってはならず、その「いへ」に恒常的に住む者でなくてはならないからである。

これと共存しうる形で、「いへ」にはもうひとつ重要な用法があるように思う。それは「やど」語とも通じ合う「いへ」である。具体的な特徴を述べるなら、「いへ」の中の風物を詠むものである。

大伴坂上郎女歌一首
カセツリユキハフツセニナラヌワギヘノクメヲハナニナラスナ
風交雪者雖零寒尔不成吾宅之梅平花尔令落莫

（萬葉八・1445）

②「やど」の空間

「やど」語に対する先行文献の中で、『萬葉集』全体を見て用法

をもつ、「やどる場所」としての「やど」である。

次に「やど」の用字を見てみると、「屋戸」や「屋外」といった表記が多く見られる。

額田王思近江天皇作歌一首
キミマツトワガコヒラバワガヤドノスダレウカシアキノカセワク
君待登吾恋居者我屋戸之簾動之秋風吹

（萬葉四・488）

などは、歌における意味が用字と一致していることも確認できる。なお、「屋」は建築物をさす（和名抄「舎也」）と考えられるので、用字が「屋戸」や「屋外」などの例で、各歌に詠まれる「やど」の形に対応して文字が使い分けられている場合がある。とすれば、建物を基準として戸、建物の中、建物の外（庭）は「やど」に属する要素であり、「やど」が右に述べた三つの要素を含んでいる包括的な概念であるということ推測できるのではない。

なお、一部に「宿」字を「やど」に当てる例も見られた。

カムナシキングレノアメニヌレツカキミガユカラムヤカカルラム
十月鍾札乃雨丹沾乍哉君之行疑宿可借疑

（萬葉十二・3213）

さて、具体的に「やど」の性質についてもう少し詳細に考えてみることにしよう。

まず用法についてであるが、用例のなかでも、今回注目したいのは、先ほど述べた「いへ」の用例と重なる、風物を詠む「やど」の用例である。この用法は、年代の分かるものは圧倒的に八世紀に属しており、先取りになるが『古今集』以降も主要な用法である。

大伴宿禰家持雪梅歌一首

ケフフリシユキニホヒテワガヤドノフキノウメハハナサキニケリ
今日零之雪尔競而我屋前之冬木梅花開二家里

（萬葉八・1649）

また『萬葉集』における「やど」の用法は、風物を詠み込むかどうか、は別としてほとんどが「建物・庭を含む空間」を前提として考えられている。それ以外の一〇例ほどは、「やどる」の意味

この表記はすべて「やどる」という意味をもつ「やど」に用いられており（五例）、「やどる」が、中国における漢語「宿」の意味に対応することを考え合わせても、日本語としての「やど」の意味の中心は「やどる」やどではなく、建築物を中心とする住居の包括的概念だと思う。

以上を踏まえて、基本的に「やど」の指し示す空間は「建物と庭を取り囲む空間」あるいは「その一部」であると考えられる。

（3）八代集における名詞「やど」の空間

八代集における名詞「やど」の用例は、歌中に古今三〇例、後撰四五例、拾遺五四例、後拾遺六三例、金葉一八例、詞花一一例、千載二五例、新古今五二例を数える。そして、この用例は半数以上が

家に藤の花さけりけるを人のたちどまりてみけるをよめる
わがやどにさける藤波たちかへりすぎがてにのみ人の見るらむ
(古今二・120 躬恒)

といった『萬葉集』の主流である「やど」の内部の景物を詠む用法である。

『萬葉集』から続くこのような「やど」は、「やど」自体を描くことを目的とするというよりはむしろ、「やど」という場を介在させて風物を描くことを目的としているのではないだろうか。そして「やど」はその、いわばフレームとして機能するのではないだろうか。

ついで「やど」に多い例は「やど」の貸借である。

秋、たびにまかりけるに、いなみのにやどりて
をみなへし我にやどかせいなみのいふともこをすぎめや
(拾遺六・348 能宣)

これは常のすまいならざる「やどる」場所としての「やど」の存在を示唆している。先に、第2節で考察したように、この種の用例は、『萬葉集』から見ることでできるものの、「やど」の中心的な用法からは外れる。しかし、中古に入ると用例の全体に占める割合が増加してくる。用法として定着していることを示しているといえよう。

以上より、「やど」の用例には大きく分けて二種類が存在しているが、特にやどる場所の「やど」は中古において「やど」の一用

法として確立されていた。

「やど」の二つの用法は、意味の面でかなり違いがある。しかし、ともに特定の建築物ではなく、人のいるところを、寝殿造で言えば寝殿から庭の風物にいたるまで包括した空間概念であるところ、特徴を見るべきだと思う。すなわち、そこがすまいのどこであるのかという興味よりも、そこをとりまく状況・風物の方に重きが置かれている。「やど」は「やど」という、人のすまうべき空間として包括的に規定されれば詠歌上問題はない。しかし、それがひとつの空間であることは、詠歌上前提とされていたはずである。この点が、『萬葉集』から継承されている認識であると考えられる。

(4) 中古において残った「いへ」

先に、「いへ」という語が『萬葉集』の歌の中に多く用いられてきたものの、『古今集』に至ってほとんど消失するということを述べた。もちろん、和歌の世界から完全に「いへ」を消し去っているというわけではない。以下、残っている「いへ」の例を示し、それらがどういう用法をもつか考える。

① 題知らず

かきくらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞ鳴く

(後撰一・33 読人不知)

② かよひ住み侍りける家の前なる柳を思やりて

鶯の声

(後撰一・41 躬恒)

③ 題知らず

もみちばをわけつつゆけば錦着て家に帰ると人や見るらん

(後撰七・404 読人不知)

④ 鶯を詠み侍りける

うちきらし雪は降りつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞ鳴く

(拾遺一・11 家持)

⑤ 夏山をこゆとて

家にきてなにかたらむあしひきの山郭公一声もがな

(拾遺二・97 久米広縄)

⑥ うるかいら

この家はうるかいりても見てしがな主ながらも買はんとぞ思ふ

(拾遺七・412 重之)

⑦ 道をまかりて詠み侍りける

よそに有りて雲居に見ゆるいもが家に早くいたらむあゆめ黒駒

(拾遺十五・910 人麻呂)

⑧ 題知らず

こひてしねこひてしねとやわぎもこがわが家の門を過ぎてゆくらん

(拾遺十五・936 人麻呂)

⑨ 三条の尚侍、方たがへにわたりて帰るあしたに、しづくに濁るばかりの歌、今はえ詠まじと侍りければ、車に乗らんとしけるほどに、家ながらわかる時は山の井のにこりしよりもわびしかりけり

(拾遺十九・1229 貫之)

⑩ 題知らず

春日山雲井かくれて遠けれど家は思はず君をこそ思へ

(拾遺十九・1244 人麻呂)

⑪ めの死に侍りてのちかなしびてよめる

家にいきてわがやを見れば玉笹のほかにおきける妹がこまくら

(拾遺二十・1319 人麻呂)

⑫ 題知らず

世の中に牛の車のなかりせば思ひの家をいかでいまし

(拾遺二十・1331 読人不知)

⑬ 乳母せんとしてまうできたりける女の乳の細う侍りければよみ侍りける

はかなくも思ひけるかなちもなくて博士の家の乳母せんとは

(後拾遺二十・1217 匡衡)

⑭ 後朱雀院かくれ給ひて、上東門院白河にこもり給ひけるをききてうしとてはいでにし家をいでぬなりなど古里にわが帰りけん

(新古今・812 女御藤原生子)

以上十四例であるが、うち①④⑤⑦⑧⑩⑪は『萬葉集』所載歌の異伝である。また、⑫は仏教語の「火宅」を意識しており、⑬は「いでにし家」で「出家」を指す。どちらも複合語に準ずるものと考えられる。さらに、⑫は風物を描いているといえるが、「いも」という萬葉風の語を用いていることを考え合わせると、躬恒が「萬葉振り」を意識して詠んだものと考えるのが妥当だと思ふ。

③は『史記』項羽本紀「富貴にして故郷に還らざる」に依拠するものとされ、だとすると「いへ」は家族・故郷といった共同体的な集団として捉えるべきだろう。同じく背景に集団をもつものとしては⑩の「博士の家」を挙げることができる。

⑥、⑨は先に第2節①で検討した萬葉期の用法「所有を前提としたいへ」の系譜に連なるものといえる。⑥は「家を売る」という表現が、伊勢の歌の詞書(古今十八・990)にあるものの、歌としては所有を前提とする、古今以降では珍しい例に数えられる。⑨は「山の井」に対して「家ながら」と述べていることから場所性が強く意識されている。

以上、『古今集』以降の「いへ」を含む歌は、家系や集団を背後にもつ「所属」という意味合いを持つ用法、また、所有を前提とする、場所を意識した用法に集約することができる。

(5) なぜ「いへ」は和歌から失われたのか

以上、『萬葉集』と八代集における「やど」と「いへ」の用例について検討を行った。その中でそれぞれの共通点と相違点、そして用法の変遷があることが見いだせた。これらに、八代集において「いへ」がなぜ失われたか、その理由があるのではないか。まずは、ここまでの検討を簡単にまとめてみたい。

『萬葉集』においては「いへ」は人の所有(あるいは所属)する空間であることに意味があった。一方「やど」はやどる「やど」

を除き、建物や庭を含む空間であることが強く意識されている。となると、「いへ」で風物を詠む用法は「やど」を用いるべきであると考えられるが、実際には「いへ」で風物を詠む用法も存在する。所有する空間であることと、そこに風物を詠むことは両立しうるということになる。

八代集全体では、「いへ」と「やど」の用法は『萬葉集』におけるそれとは違い、明確な区別を持つようになっている。「いへ」はより「いへ」の所有や所属を明らかに含む形になっているし、「やど」はより空間であることを強く意識する。すなわち『萬葉集』における「やど」と「いへ」の用法をはっきりと分ける方向に進んでいると考えていいだろう。

この変化は用例数においては突然訪れたもののようと思われるが、変化の境目に「わがやど」という表現を位置づけることによって理解されると思う。「わが」という所有を示す語と「いへ」のもつ所有性とは重なる部分が大きいからである。

その意識で『萬葉集』における「わがやど」の用例を見ると、第四期、特に家持が多く用いており、所有する人に対する思いではなく、所有する空間を描く場合に用いる。また「いへ」の『萬葉集』における用法において欠かせない要素は「所有」であり「風物」でなかったことを考えると、「いへ」や「わぎへ」よりも、自然を描く場合にしつくりとくるのが「わがやど」だったはずである。この「わがやど」という表現が、歌を個人的なものとして意識するようになった家持により確立されたことも、個人的な自然を描くときに「わがやど」を用いるという意識につながるように思われる。ここで、所有する空間の自然を描く場合にも「いへ」や「わぎへ」でなく「やど」を用いる意識が確立され、所有や所属を強く意識する「いへ」という表現は和歌から失われたものと考えられる。

*本文中の和歌引用はすべて新編国歌大観CD・ROMによった。ただし、一部私に表記を改めたところがある。

*参考文献

- 伊丹昇 『ヤド』と『ヤドル』 『文学論叢』三二巻 一九六五・六
- 木村徳国 「イヘー語の非建造物説を中心に―『わがヤド』―花鳥風月的住宅観の成立―」 『上代語にもとづく日本建築史の研究』中央公論美術出版 一九八八
- 後藤和彦 「いへとやど―万葉を中心に―」 『薩摩路』十一巻 一九六七・一
- 田中大士 「我がやどの驚―家持の空間構成―」 桑原博史編『日本古典文学の諸相』勉誠社 一九九七
- 中西進 「屋戸の花」 万葉七曜会編『論集上代文学3』笠間書院 一九七二
- 半沢幹一 「私物化された自然空間―古代和歌における「わがやど」―」 『表現研究』六六巻 一九九七・一〇
- 真鍋次郎 「家もあらなくに」 『萬葉』七四巻
- 森淳司 「万葉の『やど』」 『万葉とその風土』桜楓社 一九七五
- 吉井巖 「いへ・やど・やね」 『萬葉』一〇四巻 一九八〇・七
- 若山滋 「『家』と『やど』―建築からの文化論」 朝日新聞社 一九九五